

『鑑賞日本現代文学』②

太宰治

『鑑賞日本現代文学』

21

太宰治

梁谷孝男編

角川書店

鑑賞 日本現代文学

第21巻 太宰治



昭和56年2月28日 初版発行

編者 饗庭孝男

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 かどかわしよてん 角川書店

東京都千代田区富士見2の13

☎ 102 ☎ 東京 3-195208

電話 03 (265) 7111〈大代表〉

印刷 凸版印刷株式会社
製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0395-580821-0946(0)

目次

太宰治の人と作品

饗庭孝男 五

本文および作品鑑賞

饗庭孝男 三

思ひ出

三

狂言の神

四

富嶽百景

七

駈込み訴へ

九

貧の意地

一六

津 軽

一八

トカトントン

一七

父

一八

斜 陽

二七

太宰治の窓

二七

二十世紀における芸術家の宿命

花田清輝 二九

太宰治論

平野 謙 二八

大庭葉蔵

亀井勝一郎 二七

太宰治論（抄）

奥野健男 二七

滅びの使徒——太宰治

高橋和巳 二九

太宰治論

磯田光一 三〇

太宰治と共産主義

本多秋五 三〇

太宰治と日本浪曼派（抄）

橋川文三 三三

太宰治とキリスト教（抄）

饗庭孝男 三一

太宰治研究案内

饗庭孝男 三三

参考文献目録

年譜

山内祥史

三七

後記

四三

装丁 岡村元夫
写真提供 田村茂、日本近代文学館

太宰治の人と作品

饗庭 孝男

1 故郷とマルクス主義への傾倒

母のイメージの不安

太宰治は明治四十二年（一九〇九）六月十九日に青森県北津軽郡金木村大字金木字朝日山四百十四番地に生まれた。父は源右衛門、母はタ子^{たね}といい、彼は第十子六男にあたる。戸籍名は津島修治。彼の家は、祖父の代に急速に産をなし、士族の土地の売買によって新興の分限者となっていた。多額納税者であり、金木銀行の経営者、大地主であった父は、明治三十九年に階下十一室、二階八室の、西洋風な趣味を交えた豪壮な家をたてた。太宰はこの家で生まれたのである。当時、家族、使用人をふくめて三十人をこえる人々が六百坪ものこの屋敷内に働いていたという。

太宰は母のタ子が病弱であったために、乳母がつき、その後は叔母のキエに育てられ、子守としては近村だけがいた。この叔母については「思ひ出」のなかで次のように書いている。

「またある夜、叔母が私を捨てて家を出て行く夢を見た。叔母の胸は玄関のくぐり戸いっぱいにふさがつてゐた。（中略）叔母は、お前がいやになつた、とあらあらしく咳く^{つよ}のである。私は叔母のその乳房に頬^ほをよせて、さうしないでけんせ、と願ひつつしきりに涙を流した」



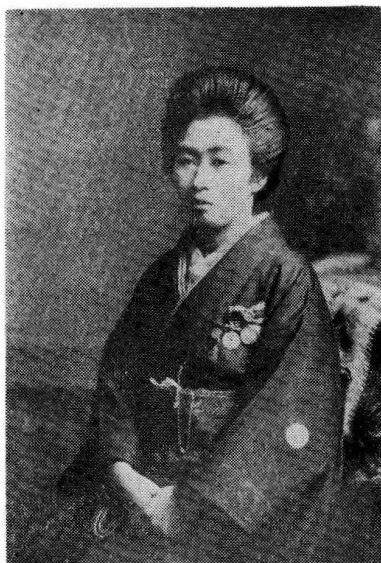
5歳の頃の太宰治

この夢は、太宰が叔母に生みの母ほどの懐かしさと愛著をもっていたことを物語っている。しかし、育ての親にせよ、親としてのきびしさがあったとすれば、それを抜きに、心から彼を可愛がったのがただである。昭和十九年、小泊に住んでいた彼女を尋ねて行った太宰は「津軽」のなかで、たけの回想をこう書きとめている。

昔むかし囁ささ語ごらせて、たけの顔をとつくと見ながら一匙さしづつ養やしはせて、手かずもかかつたが、愛めごくてのう、それがこんなおとなになつて、みな夢のやうだ」

だから太宰は、小泊へ行った時、たけのかたわらにいて「もう、何がどうなつてもいいんだ、といふやうな全く無憂無風の情態である」と思うのである。では生みの母タ子に対して太宰はどのように考えていたのであろうか。病身であつた母の懷で育つたのではない彼が「母への追憶はわびしいものが多い」とのべていることは事実だが、昭和十七年、母危篤の報をうけて帰つたあと「故郷」のなかで臨終の母の手を握って涙を流すまいと「口を曲げて、こらへ」た自分を書いている。

ただ、母、叔母、たけという三人の「母」の存在が一つに収斂しゅうれんしなかつたことが彼の生涯しよめい、自らの出自に対する「不安」を形成したことは十分に推察可能である。しかも東北という大家族制度の中における家父長の絶対的な力の



母 たね



父 津島源右衛門

なかで、父と年のはなれた長兄とに対する服従と末っ子としての自己認識が「ひがみ」と「甘え」の形であらわれ、自分は妾の子ではないかという不安をいだけるとともに「長兄を、父と全く同じことに思ひ、次兄を苦勞した伯父さんの様に思ひ、甘えてばかりゐました」（「兄たち」という態度をとらせた。

ところでこの長兄は早大に学び、文学青年であつたが、やがて政治の世界に乗り出し、のちに衆議院議員、青森県知事となつた。次兄も文学を愛したが、戦後、金木町長をつとめることになる。三兄は上野美術学校（現在の芸大）の彫刻科に入つたものの、二十七歳で死去、なお、太宰の下に礼治という弟がいたが十七歳で亡くなっている。したがって彼が自らを末っ子とみていたのも当然であろう。なお、姉が四人いたが、長姉は二十四歳で亡くなっている。彼が「思ひ出」のなかで「私は姉たちには可愛がられた」とあるのは、その長姉と、すでに他家に嫁いだ次姉をのぞいた二人のことである。

文才と民俗性

彼は大正五年（一九一六）に金木第一尋常小学校に入る。成績は六年間をおし

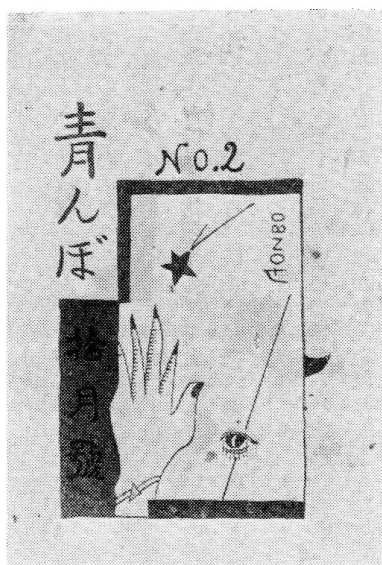
て全甲で首席であつたが、たとえ父が金木の實力者であつても掛値なしの秀才であつた。とくにすぐれていたのは綴方である。彼の文才からすれば当然のことと言えるが、この綴方は、ありのままを綴るというより、彼の想像力の所産であつた。「思ひ出」のなかで「学校で作る私の綴方も、ことごとく出鱈目であつたと言つてよい。私は私自身を神妙ない子にして綴るやう努力した。さうすれば、いつも皆にかつきいされるのである」と書いている。物語るという能力によって同時に人間関係のきずなをつねに保つこと、これは「道化」や「サーヴィス」とともに太宰の他者へのむすびつきの特異さをあらわしているともいえるが、それはともかく、彼は、嘘をつき、想像力のゆたかさを用いて話をつくりあげる能力の持主であつたことを示している。

後年、彼が「駈込み訴へ」を書いた時、「淀みも言ひ直しもなく、さながら、蚕が糸を吐くやうに続いて、言つた通り筆記してそのまま文章」（「思ひ出の断片」）になつたという口述筆記の体験を美知子夫人が語っている点からも右の事柄が納得できるだろう。これは一種の憑依状態のような精神から生まれる卓越した表現のしるしである。ついでに言えば太宰の生まれた津軽が、全国でも数少ない巫女（いたこ）の「口寄せ」が日常化している場所であり、その巫女の「かたり」の特異性は、民俗的な問題としても、太宰の心性に何らかの意味をもっていると言つてもよい。太宰は小学校生活を通じて、町の有力者の息子として特別な扱いを受ける一方、家では大家族の中の末っ子であり、乳母、叔母育ちとしての不安な状態を持ち、「家」と自分との関係に自然な目をむけることができないという点で、人間関係について早くから悩んだことは当然であろう。この違和感は終生彼につきまとつた。「嘘」も「道化」も「サーヴィス」も、そこからの何らかの回復手段であつたと言つても過言ではない。

早熟の才能

大正十二年、県立青森中学校に入学、遠縁にあたる青森市寺町の豊田太左衛門の家に止宿した。当主の太左衛門は彼を可愛がった。

「私は、新しい袴と黒い袴とあみあげの靴をはき、いままでの毛布をよして羅紗のマントを洒落らしくボタンを



「青んぼ」津島家の兄弟雑誌

かけずに前をあけたまま羽織つて、その海のある小都会へ出た」

はじめて家を離れて北の都会に止宿し、中学校へ行くようになった太宰は、この体験をほこらしく思い、「はじめての帰郷のときは、私は故郷の弟たちに私の中学生生活の短い経験を出来るだけ輝かしく説明したく思つて、私がその三四ヶ月身につけたすべてのもの、座蒲団のはてまで行李につめた」ほどである。

中学の勉強は面白くはなかったが、「お前は衆にすぐれてゐなければいけないのだ」という強迫観念から勉強にはげみ、成績はトップクラスであった。しかし三年生になって彼は人生に対する目標を見出したのである。つまり「作家にならう、作家にならう、と私はひそかに願望した」（「思ひ出」）のである。それは当然のことながら仲間を呼び集めて同人雑誌をつくる方に彼をみちびいてゆく。すでに大正十四年三月に、「青森中学校校友会誌」に「最後の太閤」を発表していたものの、それにはあきたらず、この年の夏に「星座」という名の雑誌を出した。彼はそこに戯曲「虚勢」を発表したが、この雑誌は一号で廃刊している。その

後、この年の十一月に、弟の礼治をはじめ、友人たちと同人雑誌「屋気楼」を発刊、編集、発行は自分の手で行ない、青森の止宿先をその発行所とした。この雑誌は昭和二年二月までつづき、十二号まで行ったが、太宰はそこに習作「温泉」「犠牲」「地図」「負けぎらひト敗北ト」「私のシゴト」「針医の圭樹」「瘤」「將軍」「哄笑に至る」「モナコ小景」「怪談」等を書いた。

なお、これと並行するように三兄、圭治の提唱で「青んぼ」という同人雑誌が出た。経費は津島家が出し、そこに

太宰は「辻島衆二」のペンネームで作品を書いたが、この雑誌は二号でおわっている。この頃、家の小間使いであった宮越トキを彼は好きになった。当時、十四歳であった彼女に文学的なイメージを与えて彼は考えている。彼はあるロシアの作家の小説を読んでこう思う。

「私はその小説のもつと大きなあじはひを忘れて、そのふたりが咲き乱れたライラックの花の下で最初の接吻せつこんをなしたベエジに私の枯葉の枝折しをりをはさんでおいたのだ。私もまた、すぐれた小説をよそごとのやうにして読むことができなかったのである。私には、そのふたりがみよ（トキ）と私とに似てゐるやうな気分がしてならなかった。私がいま少しすべてにあつかましかつたら、いよいよ此の貴族とそつくりになれるのだ、と思つた。さう思ふと私の臆病さおくびょうさがはかなく感じられもするのである」（「思ひ出」）

いかにもこの恋は「はかなくをはり」トキは故郷に帰ってしまう。太宰はこの思い出ののち、やがて受験勉強にとりくんで四年修了で昭和二年に弘前高等学校文科に入学した。この時も、遠縁にあたる藤田豊三郎のところに止宿した。同じ学年に、のちの作家石上玄一郎（上田重彦）がいた。

この弘前という町は津軽藩の城下町であり、桜の美しい城跡にたつ太宰は「脚下に、夢の町がひっそり展開してゐる」のを見る。「古雅な町が、何百年も昔のままの姿で小さい軒を並べ、息をひそめてひっそりうづくまつて」いるのに彼は感動をおぼえたほどである。

この町で三年間を彼は過ごすことになるが、やがて芥川龍之介の自殺の衝撃による生活の惑乱、芸妓、紅子（小山初代）との恋愛、マルクス主義への傾斜が重なり合いながら、太宰を作家としての自覚にみちびいてゆく。

夭折への希求

ところで芥川の自殺が、すでに戯曲「虚勢」のなかに芥川の影響を刻印していた太宰にとって大きな事件であつたことは言うまでもない。東北の片田舎から見る華やかな東京の文壇における惑星とも映じていた芥川が、才能というものに対する稀な典型と太宰に見えたのも無理はない。「鉄は赤く熱してゐるうち

に打つべきである。花は満開のうちに眺むべきである。私は晩成の芸術といふものを否定してゐる」(「老年」という太宰の言葉の中に芥川の才能と自らの才能を重ねて見る目が働いていないということではできないだろう。太宰が「晩年」という処女作品集をふりかえり「私はこの本一冊を創るためにのみ生れた。けふよりのちの私は全くの死骸である。私は余生を送つて行く」(昭和十一年、「晩年に就いて」とのべている言葉のなかにも私たちは、芥川の死の反響をうかがうことができるだろう。

芥川とのこの関係について、福田恆存が、「道化の文学——太宰治について」(昭和二十三年六、七月)のなかで太宰を「芥川が生涯のをはりに辿りついた地点から出発してゐる」とのべ、さらに「太宰は芥川龍之介の生涯と作品系列とを、いはば逆に生きてきたのである。芥川龍之介はその一生のをはりに『或阿呆の一生』と自殺とを置いた。太宰治はその作家活動のはじめに『歯車』や『或阿呆の一生』にならつて『葉』や『思ひ出』などを書いてしまつてゐた」とのべたのも、この両者の文学的な「出会い」を適切に語っていることになる。

マルクス主義 しかし、芥川とのつながりは、才能についてだけではなく、当時のマルクス主義運動への文学者の運動への参加 参加をめぐる問題にも接点をもっていたのである。いうまでもなく、昭和元年からマルクス主義運動は擡頭期に向かつていた。この年、学生の社会科学研究所禁止の通達が文部大臣から出ている。しかし太宰のいた弘前高校には、彼と入れ違いで出た田中清玄(のちの共産党の主要人物)ののこした組織ができていた。この頃から旧制高校、大学を風靡したマルクス主義運動への熾烈な関心と参加が太宰をひきこんで行ったことも不思議ではない。彼よりほんの少し年長であつた宮本顕治、唐木順三、井上良雄、伊東静雄等の青春は、まさしく、芥川の死を思想と文学の問題として考え、それをどのようにのりこえるかということに賭けられていたと言つても過言ではない。

太宰の、新興成金地主としての負い目に、このマルクス主義運動がもたらした影響は他のインテリゲンチヤよりもまして屈折したものとなつた。芥川の自殺を「苟しくも良心ある所謂既成作家としては当然の結果」(「細胞文芸」創

刊号」と書いた太宰は、この時期の習作「学生群」のなかでこのべずにはいられない。

「死ねば一番いいのだ。いや、僕だけぢやない。少くとも社会の進歩にマイナスの働きをなして居る奴等は全部死ねばいいのだ」

これと殆んど同じ言葉を「晩年」のなかに見ることができるが、こうした判断は、かつて有島武郎が「宣言一つ」や「泉」のなかで、自らを旧い階級の一人として規定して破滅をすんでえらびとうとした考えと酷似したものである。けれども、本多秋五が「太宰治と共産主義」のなかでのべているように「意志なく、計画性なく、克己心もなく、人が生きるのに必要な能力を欠き、生きるのに必要でない能力ばかりが秀いでた人間」である太宰が、マルクス主義運動に加担したそのかわり方が、彼自身「学生群」のなかで的確に自己批評しているような「共鳴者、あの見栄えのしない財政的支持者が僕のギリギリの役割」であったことは当然である。

太宰は昭和三年「細胞文芸」を創刊、ここに作品を書き、さらに翌年、弘前高校校長の公金流用をめぐる排斥運動に加わった。これを素材として「地主一代」等を書いたのである。しかしこの頃、彼が芸術と思想の関係をどう考えていたかは次のような「学生群」の中の文章によくうかがわれよう。

「芸術運動は、階級闘争の輝ける逃避場である。芸術は、殊に文学は決して革命家を養成し得ない。浪漫的な、随つて没落の見えすいた革命家をのみ作る。共鳴者、之は文学によつても作り得る」

とはいえ、彼には一方ですでに地方の保守勢力の中心の一人となりつつあった兄、文治と、マルクス主義運動への「共鳴者」としての自らの位置との間に思想的煩悶をもったことは当然であろう。昭和四年彼が自殺をはかったことは、一説にあるように芥川の模倣があるとしても、すでに触れた屈折したコンプレックスの結果だと言えなくもない。

放埒な青春

ところが太宰が弘前高校時代に、芸妓、小山初代と親しくなり、また、義太夫にも凝りはじめ、革命への関心とは別に放埒な生活への片鱗をみせはじめていたことは注目に値する。彼女とは昭和五年、

太宰が東大の仏文に入った年、生家からの分家除籍を条件に仮祝言をあげ、翌年から同居生活をはじめている。

「そのとしの秋に、女が田舎からやつて来た。私と呼んだのである。Hである。Hとは、私が高等学校へはひつたとしの初秋に知り合つて、それから三年間あそんだ。無心の芸妓である。私は、この女の為に、本所区東駒形に一室を借りてやつた。大工さんの二階であつた。肉体的の關係は、そのとき迄いぢども無かつた。故郷から、長兄がその女の事でやつて来た」(『東京八景』)

けれども「分家除籍」が彼を苦しめたことは言うまでもない。彼は大家族制度のつよい東北人の意識で、そこから切りすてられる怖れのあまり、錯乱したようになり、昭和五年、初代との祝言の前に、知り会つたばかりの銀座のカフェの女給田辺あつみと鎌倉腰越でカルモチンによる心中を企てる。女は死んだが彼は助かつた。この事件の処理もまた、長兄と、その意を受けた呉服商の中畑慶吉、及び洋服商の北芳四郎が行なつた。この時、中畑は太宰の下宿部屋にあつた、左翼文書の入つた行李を焼いたという。

昭和六年から七年にかけ、なお彼はいくどか住居を移しながら非合法活動に加わり、財政的援助のシンパとして働いたようだが、七年の七月に至つて長兄にともなわれ青森の警察署に出頭、共産党との絶縁を約した。この事について、当時政友会の北津軽支所長としての長兄の太宰に対する立腹が働いていることは推測にかたくない。

2 才能の開花とキリスト教

「滅亡の民」の自覚

非合法活動の終焉が「遺書」のつもりで太宰に「思ひ出」を書かせたことは「東京八景」の回顧にあるとおりであるが、しかし、太宰はなお「ばかな、滅亡の民の一人として、死んで行かう、と覚悟をきめてゐた」ことは事実であり、文学的には民俗的な作品、「魚服記」「列車」「葉」「猿面冠者」

「ロマネスク」を昭和七年から九年にかけて書き、井伏鱒二のところに出入して創作についての示唆を受け、かつ檀一雄、津村信夫、山岸外史、今官一、木山捷平、森敦らと「青い花」を創刊したものの、生活の上では放埒であつたことに変わりはない。

昭和十年、三月、彼は東大を卒業できないことが決定した。それも当然である。彼は仏文に入った時もフランス語を知らず、それ以降も、これを学ぶということをほとんどしなかっただけではなく、非合法活動と女の問題、その後は創作に身を入れていて学業をかえりみなかったからである。彼は三月の中頃に鎌倉の山中で縊死をはかって失敗、さらに盲腸炎をおこしたあとの鎮静剤として用いたバビナールに中毒し、昭和十一年の十一月に、武蔵野病院で完治するまで一年余、破滅的な生活をおくった。

「老人ではなかつた。二十五歳を越したただけであつた。けれどもやはり老人であつた。ふつうの一年一年を、この老人はたつぷり三倍にして暮したのである。二度、自殺をし損つた。そのうちの一度は情死であつた。三度、留置場にぶちこまれた。思想の罪人としてであつた。ついに一篇も売れなかつたけれど、百篇にあまる小説を書いた。しかし、それはいづれもこの老人の本気でした仕業ではなかつた。謂はば道楽であつた。いまだにこの老人のひしがれた胸をとくとく打ち鳴らし、そのこけた頬をあからめさせるのは、酔ひどれることと、ちがつた女を眺めながらくなくき空想をめぐらすことと、二つであつた。いや、その二つの思ひ出である。(中略) 老人の永い生涯に於いて、噓でなかつたのは、生れたことと、死んだことと、二つであつた」

これは昭和七年二月に彼が「文芸」に発表した「逆行」の冒頭の文章である。むろんここには、かなりの誇張と虚飾がある。しかし、この文章全体から伝わる現実感^{リアリティ}は確かであり、当時の太宰の精神状態をよくあらわしているよう。換言すればそれは「晩年」全体を支配する基本的な調子であると言つてもよい。「ドラマを人生と見做してゐた」とする彼の人工的な生の黄昏^{なごり}がここにあらわれているよう。この「逆行」は同年八月の第一回芥川賞の候補になったものの